

2008年10月6日

未陰 章江殿  
中林のり子殿  
中林美江子殿

社団法人 日本建築学会 近畿支部  
支部長 渡邊 史夫

### 中林邸の保存に関する要望書

拝啓 時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、貴下におかれましては、1941年（昭和16）建設の邸宅を含む、京都市東山区今熊野北日吉町にご所有の土地建物を売却の予定である旨、伺っております。

この邸宅(以下、中林邸)は、別紙「見解」に記しますとおり、20世紀日本を代表する建築家・村野藤吾（1892～1984）の設計によって、1941年に完成したものです。和洋を巧みに融合した意匠と、良材を生かした精緻な施工は、近代日本の住宅の歩みの掉尾を飾るものといつて過言ではありません。

近年では、こうした建築物は、建築資源の有効活用の視点からも、構造体の補強および機能に応じた整備によって長寿命化を図り、新たに活用してゆくことが求められております。

貴下におかれましては、このたびの計画に際し、その価値を十分に認識され、かけがえない文化遺産を後世に継承していただけるよう、深甚なるご配慮をたまわりたく存じます。

なお、本会はこの建築の保存に関して、技術的支援などできます範囲でお手伝いさせていただきますことを申し添えます。

今後とも、この優れた由緒ある建造物と環境の保全に、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2008年10月6日

## 中林邸に関する見解

日本建築学会 近畿支部

近代建築部会 主査 橋寺 知子

### ・建物の概要

中林邸は、京都の百貨店「丸物」の経営者であった中林仁一郎（なかばやし・にいちろう、1891～1960）の邸館として1941年（昭和16）に京都市東山区東山七条東入ル今熊野北日吉町に建てられた。

設計図面の日付からみて、設計に着手したのは1938年（昭和13）か39年の前半と思われる。本格的な工事は40年夏以降とみられ、竣工は翌41年である。設計は村野藤吾、施工は清水組（現・清水建設）で、棟梁として中村外二が参与している。

ほぼ正方形をなす約570坪の敷地に建坪約140坪、2階約80坪、地階約30坪の建物が置かれている。（他に主屋南側に約30坪の茶室・附属屋が接続していたが、これらは現在は主屋の西側に移されている。）

東面に奥行き14尺に及ぶ深い車寄せを設けて主玄関を開き、その奥に2層吹き抜けのホールを配する。ホールから西奥へは和風応接室・食堂・夫人室・仏間・主人室などを雁行させて並べる。2階は、残月床を構える12畳の客間を中心に、書斎・子供部屋・令嬢室などを配する。

### ・住宅史上の評価

日本の近代住宅における最大の課題は和と洋の二重生活に建築としてどのように対応するかという点にあった。ここでは東側の公室をイス座の洋間とし、西側の私室群をユカ座の和室とする一般的な使い分けに従いながら、応接室や階段ホールなどを中間的な領域として扱うことで、和洋を滑らかに連続させることに成功している。意匠的にも、玄関廻りの大理石を多用した歴史様式から、ホールのモダンデザインを経て、私室群での純和風に至る流れは違和感なく統合されている。ここには明治以来の邸宅建築の課題が巧みに解決されているといえる。また、ここで用いられている建築材料はきわめて良質なものであり、

それを生かす施工の技量もまた驚くべき水準にある。

・村野藤吾作品における評価

村野藤吾は日本近代を代表する建築家の一人であり、文化勲章を受章し、芸術院会員でもあった。村野藤吾は1929年に自らの事務所を設立し、森五商店、心齋橋そごうなどの設計で高い評価を得る。建築家として声価を高めるにつれて大邸宅の設計を手がける機会も多くなり、1930年代には中山悦治邸、中山半邸、中橋武一郎など設計している。それらでは、突き板による平滑な面を生かしたモダンデザイン的なインテリアが追求されており、また和風住宅の伝統を生かす手法がさまざまに試みられていた。当建築では、それらの手法を駆使しつつ、モダニズムの幾何学形態の中に象嵌による装飾を織り交ぜたり、和室においても書院造りの格調を追求するといった新たな展開を見せている。いわば村野藤吾が戦前期に到達した住宅設計手法の総決算というべき作品といえる。

これらの点から見て、当建築は近代住宅史上、傑出した存在であり、その価値はきわめて高いといえることができる。



中林邸前面外観

(撮影：石田潤一郎氏)